

古典和歌との比較における 唐詩の中の都市と建築

正会員○ 張 奕文^{*1}
同 若山 滋^{*2}

1. 研究の目的

本研究では、中国文化史上最も詩文が栄え、日本文化にも大きな影響を及ぼした唐の時代(618-907年)の代表的な詩人で、かつ日本の詩歌文学にも大きな影響を与えた李白、杜甫、白楽天の詩を取り上げ、そこに現れる都市と建築空間を分析すること^{註1)}によって、その空間像を探ると共に、既にAIJ.論文報告集に発表されている「『万葉集』における建築空間」、「『古今和歌集』と『新古今和歌集』における建築空間」と比較し、中国の唐の時代と、日本の万葉時代から鎌倉初期にかけての詩歌文学に登場する、都市および建築空間の性質について、比較論的な考察を行うことを目的とする。

2. 建築用語の出現頻度から見る唐詩の空間特性

建築用語は唐詩において、「李白」91首のうち79首の詩歌から158種301個、「杜甫」59首のうち56首の詩歌から209種331個、「白楽天」88首のうち78首の詩歌から242種526個が抽出される。3作品合わせてみると、[建物] 225例と[庭] 223例が圧倒的である。内部空間を表す[部屋][部材・建具][家具・用具]の用語は少ししかみられない。この点は和歌の場合と類似している。

2-1. [建物]について

建物全体を表す言葉が多いのは、唐詩に共通する特徴である。最も多いのは宮殿に関する用語33例と、「楼」(楼閣) 29例である。次いで「寺・院」が17例で、「草堂」「宅」「台」なども多くみられる。また、「家」が30例と多く、その中には派生語が4例含まれる。

政治と経済の発展、文化の国際交流によって、唐王朝は中国古代文化の最も輝かしい時期であり、同時に中国古代建築の高潮期であった。この時代に営造された首都の長安と東都の洛陽に、大量の宮殿、官庁、寺院が建てられた。そういった時代状況を反映して唐詩の中には、「宮」「紫禁」「殿」「行宮」「後宮」など皇宮についての描写が多く現れるが、それらは『万葉集』初期のような単純な宮廷賛歌ではなく、その中に住む人の心情を思ったり、宮女の不幸に対して同情したものなどがある。唐の詩人は政治的、社会的な意識を強く持ち、それを詩に詠み込むことが和歌とは異なるところである。

唐詩には、「楼」「台」が情感を展開する舞台としてよく登場し、「楼」「台」に登って酒を飲み、遠く眺め、高い視座から思想的観念を展開するケースが多い。高樓の機能の一つは眺望であるが、それは人々の意識を自然へとつなぎ、空間意識を広げる効果を演出しているのである。「瑶台」は天の仙女の住まいであり、唐の詩人にとっては楽しい気分の表現の空間となっている。

「家」は住居として、家族である「妾」「小兒」「嬌女」など、そこに住む人との関係が強く意識されている。「家」はその内部状態に対してよりも、外部の自然とのかかわりについて多く詠まれている。これは、『万葉集』の場合と同様に、詠み人が「家」から離れた状態で家人を想うという傾向で、唐詩の中で「家」が人間、主として家族にかかわる感情を直接に伝える対象となっていることを示している。

唐詩の中で、「草堂」は素朴な空間であり、また自分の住居を「廬」「茅屋」「茅宇」「茅茨」と謙遜して称する傾向もみられる。これは和歌における「庵」(いは、いはり)に対応すると思われる。杜甫の人生において「草堂」における3年間は、苦難に満ちた一生の中でも、最も精神の安定した時期で、「草堂」の生活に安定した精神を感じさせる。

唐の時代は、寺や塔、石窟など、中国における仏教建築の盛期であるが、唐の王室が道教の始祖李耳(老子)と同姓で道教を唱道し、道教の寺院も多く建造された。唐詩の中では、仏教建築は少なく、道教の「寺」「院」「招提」が多くみられる。

住居の「荘」「宅」「屋」「広廈」「廈」「第宅」「甲第」も多くみられ、盛唐の時代に高官の「第宅」「荘」と庶民の「宅」の区分という厳しい等級制度を体现している。

また、宮中の図書館である「蘭省」「芸閣」「蘭台」「秘書」「秘省」や、亭、酒場、駅舎などの用語もみられ、この時代の建築様式の多様性を示している。

2-2. [庭]について

[建物]とはほぼ同じ頻度の[庭]は、「白楽天」「杜甫」において頻度が最も高い。庭の構成物として表されているのは「花」「竹」「松」「林」「樹」「葉」「柳」

「紅葉」「芙蓉」「蘭」など自然植物がほとんどであり、他に「池」「水」「泉」なども多くみられることから、白楽天と杜甫の空間情緒は自然、特に身近な草花に向かっていることがうかがえる。「曲江」「南苑」「芙蓉」「楽遊園」「梨園」など長安の名高い御苑もよくみられ、唐の時代の繁栄した経済のもとで、御苑と別荘をかねた高官の荘園が数多く造られた背景が現れているといえる。

2-3. [部位] について

[部位] の中では、「門」がほとんどである。宮門の「闕」と「都門」「城闕」「宮闕」「寺門」「宮門」「柴荆」（雑木の門）もみられる。一般的住居の「門」は外部から見る建築の姿を指し、間接的に「家」のことを示すのに対して、宮殿の「門」は、外部から「宮」の姿を指す。門を指すことはその内部を深く意味し、間接的にそこに住む人を表現する傾向がある。

2-4. [都市] [都市施設] について

[都市] の中では、都市と町を意味する「城」が多い。「長安」「京」「都」「京華」「秦」「京城」「帝都」などの帝都を意味する言葉は、宮仕えへの望みを強く抱いていた唐の詩人の心の表れといえよう。同時に、ふるさとを意味する「村」「故郷」も多く登場する。「子城」という言葉は、唐の時代に近代の衛星都市という概念で都市を営造したことを表しており、興味深い。[都市施設] は、「道」「路」「大道」がほとんどを占める。これらの道は家族、都、友人への想いにつながっている。

3. 唐詩の空間と和歌の空間

『万葉集』『古今集』『新古今集』の三作品における建築用語は、『万葉集』では「家」、『古今集』『新古今集』では「やど」が最高頻度を示し、『万葉集』から『古今集』『新古今集』へ移るに従い、[建築物全体] が減少し、[部屋・部位][建具・用具][庭]が増加する傾向にある。

唐詩に登場する建築用語の全体的特徴は、に示すように、『李白』では[地名]と[建物]、『杜甫』『白楽天』では[建物][庭]を表す語が多い。隔たる期間は異なるものの、盛唐の文学が奈良朝の、中唐の文学が平安朝の文学に対応する傾向を示している。

共通して唐詩に建物全体を表現する言葉が多いことから、外部空間の優位性と雄大性がうかがえ、この点では唐詩は『万葉集』の空間に近いといえる。

和歌では「家」「やど」「宮」「殿」などの建築用語がほとんどであるのに対して、唐詩では、「宮」「草堂」「宅」「荘」などの住まい、あるいは高所からの視野によって情感を展開する舞台である「楼」「台」「亭」「城楼」、宗教的な非日常的空間としての「廟」「寺」、

政府の「官庫」、宮中の図書館「蘭省」、御苑である「苑」や仙人の住まいである「瑤台」などといった多彩な建築用語が見られ、和歌に比べて遥かに語彙が豊富で、唐の時代の都市的繁栄と建築の多様性及びそれに対応する言語の多様性を示している。またその空間に託される感情も、和歌では、家族の愛情、離別の悲哀、忍ぶ恋など、人間同士の情愛もしくは、「あはれ」という美学に収斂するものであったのに対して、唐詩では空間意識が人間感情だけでなく、政治、人生、哲学などの思想表現につながる傾向が顕著にみられる。

仏教建築全盛時代であったにもかかわらず、和歌には仏教建築がほとんど登場しない。唐詩では、道教の「寺」が多くみられ、儒、仏、道三教のうちでは道教特に老荘思想につながったものと思われる。儒教、仏教という道徳的、論理的、体系的な思想は、人間の感情が生に表現される詩歌という形式に適合しなかったというべきであろうか。

また、『万葉集』に多く現れた「家」は唐詩にもかなり多く出現し、その中に派生語として人を指す場合もみられる。「家」は家人にかかわる情感を伝える空間として多く使われており、和歌の場合と同様である。しかし「やど」は唐詩には登場しない。この点は、「やど」という空間が、日本の国風文化としての『古今集』『新古今集』において「やまとごころ」を表現する居住空間として一般化されたことと符合している。

『万葉集』は、家の外から「門」「戸」を詠むことが多く、そこでは特に皇族の住居では「門」、庶民の家では「戸」を具体的な映像として表現しているのに対して、唐詩では「門」は建築用語の中で最高頻度となって、小さなスケールの邸宅の「門」から、威厳のある皇宮の「門」、更に大きなスケールの「城門」にまで至り、「門」がその中にいる人を意味する傾向がうかがえる。

和歌においては平城京、平安京の都市的な景観を詠む歌はほとんど登場しないが、唐詩には都である「長安」の景観が数多く登場する。その一方で、「故郷」という言葉も多く登場し、唐の時代の青年は繁栄する帝都長安を目指して、大なる青雲の志を抱きつつ、故郷を離れたが、同時に故郷への想いも強かったことを表している。唐の詩人にとって「道」は長安と故郷をつなぐ情緒の空間であり、旅の道、故郷への道、都への道、政治への道、人生の道として現れている。これは和歌には見られない意識である。

注1) 1992年大会梗概集「唐詩における都市と建築空間」に発表された。

¹ 名古屋工業大学大学院・修士

² 名古屋工業大学教授・博士